

ルネサンスの社会と古代趣味：16世紀初頭のルカ・シニョレツリによる装飾事業を中心に

森, 結

<https://hdl.handle.net/2324/7182265>

出版情報：Kyushu University, 2023, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)



氏 名	森 結			
論 文 名	ルネサンスの社会と古代趣味—16 世紀初頭のルカ・シニョレリによる装飾事業を中心に—			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	井手 誠之輔
	副 査	九州大学	准教授	伊藤 拓真
	副 査	九州大学	教授	アントン シュヴァイツァー
	副 査	学習院大学	教授	京谷 啓徳

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、イタリア・ルネサンスの画家ルカ・シニョレリが 15 世紀末から 16 世紀初頭の約 10 年間に制作した作品に見られる古代受容の諸相を論じるものである。とりわけ、ネロの大宮殿ドムス・アウレアの遺跡から発見された古代の絵画装飾（いわゆるグロテスク装飾）との関係を中心に論じている。

第 1 部では、オルヴィエート大聖堂サン・ブリツィオ礼拝堂壁画装飾（1499-1504 年）を扱う。その図像プログラム助言者が大聖堂助祭アルベリであること、また装飾事業の出資者であるモナルデスキ家とシエナのピッコローミニ家が密接な関係にあったことを史料より明らかにし、アルベリと彼が仕えるピッコローミニ家との関係から、古代的要素の導入やアウグスティヌス『神の国』を踏まえた図像プログラムが、モナルデスキ家およびオルヴィエート市から教皇庁への恭順を意図するものであると解釈しても矛盾しないことが新たに指摘される。当礼拝堂の図像プログラムについては、これまでも様々な議論が積み重ねられてきたが、そこに新解釈を提出したことは大きく評価できる。

第 2 部では、フィリッピーニ祭壇画（1508 年）におけるグロテスク装飾のモチーフの導入を検討し、あわせてラファエッロのコロンナ祭壇画との関係を指摘することで、シニョレリが同時代の新たな美術動向に関心を有していたことが明らかにされている。精緻な作品観察に基づく分析がなされており、シニョレリによる古代受容の実態が具体的に詳らかにされている。

第 3 部はシエナの僭主パンドルフォ・ペトルッチの宮殿の一室「カメラ・ベッラ」の装飾事業（1509 年頃）を扱う。本装飾事業では壁画に描かれた主題が古代ローマ史等に取材するものであり、床や天井に描かれたグロテスク装飾モチーフと合わせ、古代趣味が見られる。ペトルッチの政治的立場等を検討したうえで、そこに古代趣味が導入された経緯、および装飾事業にシニョレリが招聘された理由を考察している。

本論文は、ルネサンス美術研究において重要な研究領域である古代受容の問題に果敢に取り組んだ意欲的な論考であり、礼拝堂壁画、祭壇画、宮殿装飾壁画といった複数の場において、古代的な要素がいかに機能したかについて、注文背景、複数の画家の協働といった観点から総合的に議論を展開しており、今後のシニョレリ研究に多大な貢献をなすものと考えられる。

以上のことから、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）を授与されるのに十分な能力を持つことを認める。